

## 『中野芳幸のことなど』



細田重憲

岩手県立大学に勤務して6年が過ぎようとしている。日々いろんなことに追いかけて過ぎてきたから、あつという間だったように感じられるが、年ごとのゼミ生や卒業生の顔を思い浮かべていくと、時間の積み重なりがちゃんと6年分あったということにも気付かされる。前職が福祉行政だったから、福祉についての知識や経験が少々はあって、それでなんとかなるかと思って大学に来たのだったが、それを学生にしっかりと伝えるというのはなかなか大変で四苦八苦。加えて障害者福祉は激動の時期に入っていて、制度が毎年のように変わったから（その多くは福祉の回復や前進のために必要な改正だったけれども）、それに追いつくのが結構きつかった。教員紹介などで、まず制度をきっちりと教えたいと見得を切ったことが、重荷になってきたりもした。そんなことだったから、教員としてしっかりとした仕事ができたと問われれば、自信を持ってイエスと回答するのは難しそう。ただ、毎日接する学生諸君が、半年、一年という時間幅で見れば確実に成長していると感じられたことが、だから自分はあまり貢献していないと思いながらも、喜びとなり、それに支えられて過ぎてこられたのだろうと考えている。その意味でつきあってくれた卒業生、学生諸君に心から感謝している。文脈は違っていたが、大学に来た当初、当時の佐藤忠学部長が、いろいろ辛いこともあるけれど最後は学生に助けられているよ、と語ってくれたことが、今懐かしく思い出される。その忠先生もこの6年の間に鬼籍に入ってしまった（合掌）。

ここからは、僕がこれまで出会ったなかで、信念と行動力、その学識の深さに尊敬だけではなく畏怖の念さえ抱かされた中野芳幸（盛岡市出身、1923年～1981年）という人間の、その生き様のほんの一端を紹介することで、メッセージに替えたいと思う。没後30年以上が経過し、中野芳幸の訶咳に接した人は少なく、また、福祉をめぐる状況や制度も大きく変わっ

ているが、彼が生涯をかけて示したものの意義は揺るがず、岩手の福祉を語るときにはこれからも絶対に忘れてはいけない人物だと思っているからである。

中野芳幸（以下では彼の妻中野佳子も登場するので、芳幸、佳子と表記する場合がある）とはどんな人物か。芳幸が亡くなったときの肩書は社会福祉法人岩手更生会・精神薄弱者更生施設緑生園園長というものだった。緑生園は芳幸が創始した施設で、園生の就労という点では県内だけではなく国内でも最も優れた実績をもつ施設の一つだった。しかし以下で述べるように、芳幸の仕事は障害者福祉の枠に収まるものではなく、福祉という大きな枠にも収めきれないだろう。その芳幸の生い立ちや信念、活動と多くの人とのつながりは、没後、佳子がまとめた「中野芳幸と人々」（1983年、以下「人々」、これは130人以上の人がそれぞれ受け止めた芳幸の生き様を飾ることなく書き残してくれた素晴らしい書物である。佳子が几帳面に整理していた昭和20年代からの新聞記事や写真が添えられて資料的価値も高い。以下の記述はこの本の記事、年譜をもとにしている。）に詳しいが、この本の冒頭に写真とともに掲げられている佳子の言葉「鬼面 仏性 義憤と慈愛 二つの面 中野芳幸は真実この二つの生涯であった」が芳幸を的確に表現していると思う。蛇足を承知で風貌魁偉、眼光炯々、学識深遠、交際無貴賤と付け加えれば、もう少し近づけるかも知れない。

僕が芳幸の生き様で感銘を受けるのはまず「憤り」である。佳子は義憤といているように、世の中にこんなことがあっていいのかという憤りと訴えであった。戦後間もなくの昭和20年代、芳幸は「太田村米一杯運動」、「歳末助け合い運動」「青空学級」（これは通称である）といった運動を次々と展開している。太田村米一杯運動は、非農家のあまりにもひどい食糧難への、歳末助け合いは、青山地区に住みついた引揚者の多くが、煎餅布団もなく冬でも麻袋を使って暖をとる悲惨な生活であることへの、そして青空学級は、

日雇いであるが故にPTAの会合（親たちが民主主義を学ぶ場でもあったのか？）に出たくても出られない母親が数多くいることへの、同じ人間としての憤りであった。憤りの根源にあるのは何か。それはどんな人でも人として尊重され、平等でなければならないという芳幸の信念であったと思う。その信念の確かさ、堅さと、困難を承知で臆することなく行動に移していった純粹さ、愚直さに僕は今でも打たれる。また、同じ人間として、と書いたのはもう一つ、芳幸自身当時ニコヨンと呼ばれた日雇い労働者として、引揚者や母親と同じ境遇にいたという理由にもよる。役人や教員という当時のエリートやプロの社会事業家ではない、一介の日雇い労働者の憤りが地域を動かしたのである。

芳幸の憤りは、彼の信念に発し、現実を突き動かしていくエネルギーを秘めたものであった。芳幸を始め優れた先人たちの仕事を見ると、その根っこにはこのような意味での憤りがあったのだと思う。翻って今、僕を含めて、福祉に携わる職業人たちは、現実に対し憤ることがどれほどあるだろうか。制度や資格に寄りかかり安住して、見なければならぬものに気付かずにいるのではないか。一人の人間として現実を見つめ、行動を起こした芳幸を考えるにつけ自省しなければと思うのである。

二番目は信念から生まれる鋭い問題発見能力と豊かな構想力である。1952年頃、歳末助け合いの無理が重なったのか、過労と栄養失調で盛岡日赤病院に入院する。このとき慢性疾患で長期に入院し学業から疎外されている学齢時の存在を知り、学業と療養の両立が可能な児童福祉施設建設「みどり学園」の構想を練っている。飛行機の形をした、専門家の手に依ると思われる程精巧な俯瞰図などが出来上がっていたという。また同じ頃、歳末助け合いの各戸訪問で訪れた家庭に知的障害者（表記は現在の用語とした）がいて、それが家庭の困窮に拍車をかけていることを知り、知的障害者の保護更生を考え始める。当時、成人の知的障害者を対象とする制度はなかった。（現在の知的障害者福祉法制定は1960年）。

芳幸による「みどり学園」の構想は日の目を見てはいない。後に、当時の県社協事務局長見坊和雄が中心となった「みちのくみどり学園」開設運動として展開されていくのだが、もし「みどり学園」というネーミングが芳幸のものであるならばその根っこは芳幸にあったのではないかという想像が湧いてくる。後者

は、1957年に「岩手県更生施設（仮称緑生園）建設委員会」（委員長は当時岩手医大の精神神経科教授三浦信之）としてスタートし、10年の曲折を経て1966年、精神薄弱者更生施設緑生園となって実現する。ついでながらここで芳幸の「外山福祉センター構想」（外山コロニーと呼んでいた）に触れておく。1975年、芳幸は盛岡市から外山地区の山林を借り受け、緑生園をあげて開墾に乗り出す。ゆくゆくは障害者が住みついて働きながら暮らすことを構想していた。当時すでに否定されかけていた大規模隔離型の所謂コロニーとは異なり、開拓型、生産型といえるような先例のないものであったが、外山が積雪、寒冷地であることなどから芳幸の死後中断した。外山は大豆やソバ、野菜など、今でも園の大事な作業場である。芳幸が生きていたらどんなモデルができていただろうか。ともあれこれらことから、芳幸は社会的に弱いものの視点をしっかりと持っていたから、現実にある様々な問題が見えたのだということを確認しておきたい。

以下簡単に述べる。まず感謝と奉仕である。1973年から県庁前などに視覚障害者用点字ブロックを敷設し、歩道の段差切り下げを作業として行っている。他の障害者への優しい眼差しであると同時に、園生を福祉の受け手に止めず、社会への感謝の気持ちを持つこと、自分達が社会にとって意味のある活動をしていることを理解させようとしていた。盛岡市長だった工藤巖（後に岩手県知事として本学の設置を主導）はそのため何度も園生の前で激励の挨拶をさせられている。教育、啓発としては、緑生園の建設に市内の中学生の参加を求めたことをあげておく。24人を超える中学生が、園の基礎となる石を、雫石川の川原から手渡しリレーで建設地まで運んだ。労力としてだけではなく、むしろ将来、この子ども達によって障害者理解が広がることへの期待が大きかった。

ここまでで紙幅は尽きた。芳幸の生き様から何かを伝えられたらだろうか。今僕は緑生園を運営する岩手更生会の理事長（非常勤）を務めている。芳幸には及びもつかないが、「どんな人も人として認められる社会」という彼の想いはしっかりと受けとめて、次の世代まで繋げていきたい。最後になるが、社会福祉学部の皆様には大変お世話になりました。皆様のご指導、ご鞭撻のお陰でなんとか勤め上げました。ありがとうございました。

（平成25年2月22日共通棟201教室にて）